

1644
447

吉永經和先生作詠
四竈小辰先生編輯

薩摩
琵琶歌
藪
鶯

東京書肆

東雲堂發行

一擧

一擧軽く弾きまば小珠玉盤小落

一擧猛将を泣きめ一深高く

一擧銀瓶破きて水送る鐵騎の

一擧力鳴るか如く憤然とく情

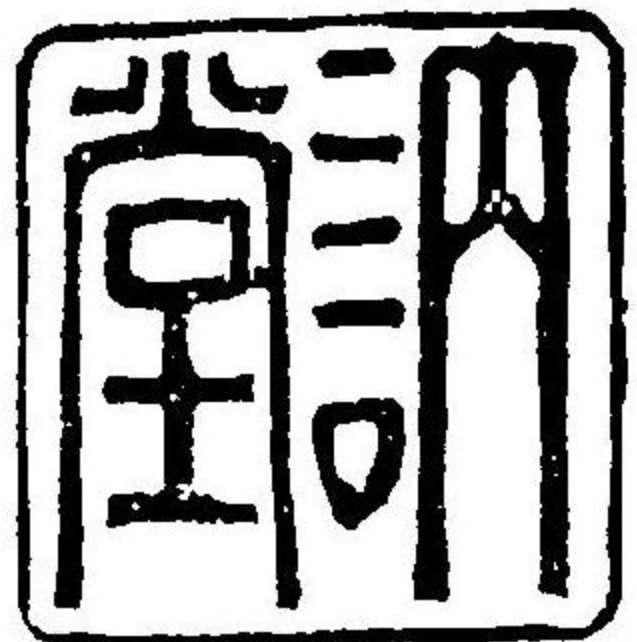
夫が記たしむ嗚呼これ日本健児

の魂膽を練り士氣を鼓舞し治小

居て乱を忘きさらしむるも然ハ
蓋しこれ薩摩琵琶の徳からん
哉

明治甲午五月上游

僊琴識



自序

人としてくせなき人のあらトとは昔も今もいひあせり
をこがましくも我もまた人あみくくにちつくさきこ
ろより琵琶を嗜みてやぶうぐひすの片ごとを轉る如
く琵琶歌を謠ひそめりあくせとなり今もいとまのあ
る時の四五の友とどよりつどひ謠ひかなでたの
むも明治の御代の賜と思ひ來れば四の緒の調べはこ
とに志みとと身に志み渡る心地せり扱友とちの勸
めよは人の鏡となる歌は古人の作も多かれど猶足ら
ざるの思あり其足らざるをつぎくにすこしなりと

も補はゞ、少年子弟が物まゐぶ、歴史の上の助にもなるべからむにいさゝかの暇もあらば綴れよといはるゝまゝにいとあさきちからもわすれ身もわすれ、藪鶯のてにをはも、そろはぬふゝをニツ三ツつゞりそめしを此巻につぎくゝのせて師と仰く、人に斧鉞を乞ふとなむ。

明治廿七年五月

作者一るす

薩摩歌藪鶯初篇目次

國の御柱	詩入	一頁
河中島	詩入 舞入	三頁
螢雪	詩入	六頁
國の譽		八頁
唐崎濱合戦		十頁
富士山		十四頁
俊寛	二段 詩入	十五頁
阿新	四段 詩入	十九頁
楠公	二段	二十九頁
同二篇目次		
雲のまかき	詩入	三十七頁

送別	詩入	四十一頁
櫻狩	詩入	四十二頁
怨の雪		四十三頁
芙蓉峯		四十五頁
吉野落	二段 劍舞入	四十六頁
御夢の跡	十二段	五十二頁

目次終

薩摩國 琴瑟歌 藪鶯初篇

薩摩國



八位吉水經和桂歌

正成の一代畧記

①國の御柱

淡州流の水のいと清く、名も橘の花の香は、八千代はおろか萬代の末の
 味までかほらち、赤坂山の秋の暮、其真心のくれあは、紅葉の色に輝
 きて、みたひよ世たる人なみを、太刀風強く打拂ひ、かなたの空は雲晴て、
 月すみよしや天王寺鐘のひびきはるれとなく、諸行無常と告渡る、川は
 寄手の三途川、おのれとおぼれ沈み行、千劍破の城にさきがけて、かつ色
 みせよ山櫻嵐や花のかたぎなるらむと、ふたりのまれもの詠みたるは、
 わが身の上としらま弓引かれて、蕪わらの人がたに、たふらかされて二つな
 き、命を落すやがらころ、哀といふもおろかなれ、金剛山の蠅蛾として、雲

の上まで聳えしは、動かぬ君が心にて、寄手を押へ其罪を、糺の前ゆ押出し、出雲路掛て火を放ち、僧都をかたらひ泣しめて、おらぬ屍を尋ねさせ、四條河原による波の、よりく人々を欺くも、心は清き櫻井の、驛に於ていとほしき、つばみの花に別れしも、皆大君の爲ぞかし、筑紫の山のはとぎす、友よびあつめ九重の、雲井の空を心ざし、飛むとするを射とめむと、弓に矢番ひ見渡せば、須磨の上野と鹿松の、岡にどよめきさけびあふ、聲はましらか小男鹿か、のがさじものと遠近に、むらがりつとふけものらを、ほぐしにあらぬ鎗先に、さしてゆくへをつくくと、思ひまはせば此のちは、山ほどとぎす山をいで、たれ憚からず啼渡る、世とやならむと未かけて、さどるたけ雄は今こゝに、死て七たび生れ來て、烏やけものをかりつくし、大御心をやすめむと、うがらつとへて湊川、おはれはかなきうたがたの、水の泡とぞ消にける、

豹死留皮豈偶然、湊川遺蹟水連天、人生有限名無盡、楠子誠忠萬古傳、

嗚呼是橘の花の香の、世々に絶せぬまゐるしにて、なきおとまでももろ人の袖にかほりは残りけり、嗚呼これ橘の花の香の、世々に絶せぬまゐるしにて、なき跡までも諸人の袖にかほりは残りけり、袖にかほりは残りけり、

○川中島

天文二十三年、秋のあかばのころかどよ、上杉謙信は、八千餘騎を従へて、河中島に打て出づ、われ此たびの戦は、武田信玄を追つめて、またしく雄を決せむと、うづまさかへす犀川を、渡りて陣をぞ取りにける、信玄は此事を、聞より早く、二萬餘騎にて打迎ひ、砦をかためて戦はず、謙信は氣をいらち、村上義清にいひふくめ、月影くらき山々の、草葉の露をわけさ

せて、おなたこなたに兵を伏せ、橋に搦せし兵ものを、出して甲斐の兵營に、ちかつかしむれば甲斐の兵策とは露しらず、朝霧のまに追まくる、待設けたる伏兵は、時こそ來れと勝鯨波を、どつとあげつゝ引つゝみ、袋に物を取る如く、一騎も残さず打取たり、信玄怒て軍勢を、雲霞の如くに繰出せば、謙信も備へを立て、打向ふ、龍躍て雲を起し、虎嘯て風を呼ぶ、勢ひ破竹の如くにて、入りみだれ入りみだれ、責め戦ふありさまは、颯風砂を巻き、百雷岩を抜に異ならず、越後の勢退けば、甲斐の軍これを追ひ、甲斐の軍退けば、越後の勢是を追ふ、兵を合すること十七度、いづれを勝としらま弓引かど見ぬし信玄が、一と手の勢の職を伏せ、川を渡りてよしおしの、ひまをひろかに忍ばせて、勇み立たる謙信の、磨本ちかく進み寄り、面も振らず切て入る、磨本の軍勢は、思はぬ兵に敗られて、走る跡より甲斐の兵、鯨波を作りて追かくる、宇佐美定行、是れを見て、猛虎の如く憤

はり、憤馬を驅て大音に、わが手の勢に下知をなし、敵の横合より、無二無三に突入て、淵瀬もいはせず追ひ落す、信玄度を失ひて、流れをみだして走る所を、謙信只一騎、黄襖驢の、逞ましきに鞭をわて、豎子いづくまで逃るぞと、いひも果さず切りつくる、信玄刀を抜にいとまなく、軍配扇にて受たれど、うちは、二ツに折られたり、

降と見て、傘とるひまも、なかりけり、河中島の、ゆふだちのおめ、と謠ひし如く二の太刀は、はや肩先に切りこみぬ、おつといふまに信玄の、命は岩にくだかる、泡と消なむ危きを、救はむとして軍兵が、心はやたけにいさめども、水駛くしてちかよれず、隊將原大隅、鎧をのばして謙信を、突はしたれど、あだ突し、かくてはならじと鎧を舉げ、只ひと打にと打たりしに、馬にあたりて馬逸す、謙信馬をしづめむと、手綱かいくる其ひまに、信玄は、虎口をのがれ去りにけり、

鞭聲蕭々夜過河、曉見千兵擁大牙、
還恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇、

斯く信支を打もらしたる謙信が心のうちはいかならむ、おもひやるだにあはれなり、信支は肩の痛手に絶かねて、其夜の中に軍勢を纏めて出る月影に、道を求めてはるくどわがふるさとに歸りけり、わが故郷に歸りけり、

○螢雪

明治の御代は古の聖の御代に彌増して、萬の業もひらけたり、仰で見れば大空に翹なくして西東自在にかける輕氣球、伏て臨めば足なくて、萬里の遠きも束の間に、言葉を傳ふる電信機、生きたる人に眼のあたり、十萬億土の極樂を、忽ち見する麻睡劑、死したる人に面白き物をいはせる蓄音器、其外遊戯にいたるまで、昔の人のおしなべて、及ばぬ基を尋ぬれ

ば、人々知識を研き磨き、折れず撓まず其道に、すゝむ勳としられけり、是れを思へば年月をたゞに暮して如何せむ、人十度する時は、己れもゝたひ是をなし、人より先にすゝむべし、若し悠々と日を送り、老朽用に耐へぬのち、日ごろの懈を思ひ出し、いかに後悔なせばとて、馴馬も逐ふ事叶ふまじ、昔陶淵明も此事を歎きのあまりに口吟む、其詩をこゝにしらべなば、

盛年重不來、一日再難晨、
及時當勉勵、歲月不待人、

又朱文公が勸學の文に曰く、

勿謂今日不學而有來日、
勿謂今年不學而有來年、
日月逝矣歲不我延、
嗚呼老矣是誰之愆、

ふたりとも心つくして斯まてに、當時の人を教へしは、皆其國の爲めならむ、されば、北野の梅もみよし野の花も霜雪しのがずは、めで度春には

逢はぬめり、人も艱難辛苦して、螢や雪のあかりまで、かりて學びの道す
ぢを、たどりてゆかば輕氣球、其名をのせて雲井まで、立昇るよりなほ高
く、自由自在に言傳ふ、電信機よりなほ早く、蕙づのわざも彌増して、日こ
と夜ごとに開けなむ、學べや學べ家の子よ、願りみもせで學ぶべし、願り
みもせで學ぶべし、

○國のほまれ 福島中佐單騎旅行

いふこと、おこなふとのたがはぬは、聖の外にたれかある、他郷にあり
ふ友をちに、いひおくりたる其文は、言葉に花の咲るひて、其行ひに實を
結び、名を天地にとどろかす、中佐の君のひとりなり、ころは明治のはた
ちまり、五とせの春國民も、外つ國人も祝ふなる、わが紀元節の祝ひ日に、
影も曇らぬ日本の本の、徽章きらめく軍服をつけつゝ、帯びし日本刀、研き
磨きたる真心を、持たる中佐の門出に、ひかれて勇む凱旋の、いなゝく聲

は伯林の都に響き渡りけり、殘むの雪はうつたかく、蹄を深く埋め來て、
身を裂ばかりすさまじき風は面を吹去りぬ、ある時は、人影見えぬ野や
山を、夜半ともいはす乗越て、異境の月に地圖を案し、又ある時は、飢たる
腹をしのびつゝ、見るもいふせきあばら家に、やどりて虫に夜もすがら、
はだへをさゝれ眠りかね、艱難辛苦を共にせし、名馬ハ疲れ進み得ず、中
佐は干々に手をつくし、藥師に乞て懸ろに、藥をあたへ水をやり、見るた
びごとに凱旋は、よろこぶ如きさまなれど、とみにいゆべくあらざれば、
彼がたてがみかきなで、涙ながらに暇をあたへ、これに代るに烏拉といふ、
馬に乗かへ行さきは、もゆるが如き夏の日を、さけむとすれど木蔭
なく、玉なす汗はせをひたし、しのつく雨は身を洗ひ、見る人恐れ聞人も、
身の毛のよだつこれらてふ、病ひの多き村里を、ものどもせず、に突通り、
さす馬蜂の鋒先の、するどき群をも切り抜て、おもひし路を露程も、たが

へす越て日の本の花も實もある君が名を聞傳へたる露西亞の帝、皇后
共に謁を賜ひ、午餐の榮を身に受て、出たつ先の國々、名だゝる人を初
めとし、老も若きもおしなべて、市に送り野にむかへ、とふとき、姫がしる
しにと、したしく贈る紀念の章、肩にかくるそ勇ましき、軍樂隊は我國の、
進軍の譜や君が代を、奏で、祝ふ其聲の、うちに送られ歸り來る、君がほ
まれは日の本の、はまれのみかは其外にも、たらずものは國の爲、世の爲
になる寶ぞと、我國民がよろこびの、まゆを開きて待にけり、まゆを開き
て待にけり。

○唐崎濱合戦

吳竹のよはかりごもどみだれ來て、空にかゞやく月と日の光もためめに
影見ぬぬ、かはたれどきに阪本の、松の木のままにいとしく、錦の御旗押
たて、大塔の宮出ましぬ、御手のうちに名を得たる、岡本房の、快實は、麻

のころもを抜すて、黒草れどりの鎧を着し、勝行房等、二百餘人と諸共
に、唐崎濱にうつていづ、茲に六波羅の大將に、海東左近將監といふ者お
り、衆徒の小勢なるをあなとりて、後陣のつゝかぬ其さきに、打てちらせ
と呼はりつゝ、三尺四寸の太刀を抜き、鎧の射むけの袖をさしかざし、敵
のうづまきて扣へたる、真たゞなかにかけ入て、三騎ばかりを切て捨、快
實遙に是を見て、突ならべたる持楯を、岸破と蹴倒し、長刀を、水車にまは
して躍りかゝる、海東心得たりといふまゝに、妻手に流して弓手に受と
め、甲の銚を真二ツに、打わらむと聲をかけ、隻手打に打けるが、打外して
二の太刀を、餘りに強くうたむとし、弓手の鎧を踏切て、落むとするを乗
なほす、すきを見掛て、東海が、喉笛はたと突ければ、何かは以てたまるべ
き、真倒さまに落たるを、快實上に乗かゝり、首かき切て、長刀の穂先に高
く貫きて、六波羅の大將、海東左近將監を、岡本房の快實が、討取たりと呼は

十二
りて陣所を指て歸る所を、軍見物のうちより黒髪を、唐輪からわにあげたる童
が、金作かねつくりの小太刀を拔、快實が甲の鉢を去たゝかに、つゞけ打にぞ打たり
ける、快實屹きつと是を見るに、年十四五ばかりにて、大眉おほまゆに、鐵漿かね黒つけたる
形勢かたちは、常の人ともおもはえず、かゝるわらはを討むこと、出家の心にお
らじとて、たゆたひをれば、わらむべは、ふみこみく切りかゝる、快實今
はせむかたなく、太刀打落して組とゞめ、つれかへらむと思ひしに、比叡ひゑ
辻つの者共が、射たる横矢にはかなくも、胸板深く射ぬがれて、哀れはかな
き唐崎の、松の木陰にしかばねを、さらす人とはなりにけり、嗚呼痛はし
や助けむと思ひしことも、水の泡消てむなしきなきがらを、いだしおこ
せば、みよし野の花の名残は、有明あきあけの、月も朧おぼろべきかむばせの、變かる色香に
哀れてふ、心をしりて快實が、おたりの人に尋ねれば、是なむ海東が嫡子
にて、幸若丸かちわらといふものなり、父將監が身のうへを、案じ煩ひ、從軍を、乞た

りけれと許さねば、軍見物といひなして、跡に附添つきたひ來りしなり、幸若稚
なしといへども、武士と生れしは、どありて、父と同じく戰場に、千とせの
齡としひをちゞめしは、たぐひ稀まれなる少年と、いひはやさんはなかりけり、か
ゝる所に海東が郎黨三十六騎、おくれれば、せにはせつけて、其快實をのかす
など、きつさき揃へて切て掛る、快實さゝもあへず、阿修羅の如くたけり
たて、四方八方へ、薙まわれれば、馬の足なみたちまちに、崩れかゝるを、佐
々木判官時信ときのぶ大音揚て、味方を討すなど下知すれば、木村馬淵等まきむら三百餘
騎にて打てかゝる、快實も、早うたれむと見えける所に、桂林房けいりんぼうの惡續あくぞく、
中の房なかのぼうの小相摸こさぶみ等をはじめ、後陣の衆徒五十餘人、入りみだれて戦ひけ
る所に、本院の衆徒も、七千餘人、堅田かたより、三百餘艘に取乗りて、敵のうし
ろを遮さへらむと、大津をさして、漕出そうしゅす、佐々木判官是を見て、叶はじとやお
もひけむ、兵をまとめて、白晝はくぢうに、都を指てそ逃かへる、大塔の官は、初陣はつぜんに、

いみじく勝を得給ひて、手始めよしと同音に、とつと擧たる鯨波の聲、唐崎濱に響きけり、唐崎濱にひびきけり、

○富士山

駿河なる富士の高嶺は昔しより、山てふ山の御親そと、世の人々にいつかれて、仰げばいよ／＼高く見ればいよ／＼あざやかなり、かぎりしられぬ大空を笠といたゞきちとせふる、雪のしらぎぬかさね着て、棚引わたる雲霧を、朝な夕なに帯とあす、いたゞきは、高くろびぬて日の本の、大御稜威をかゞやかし、裳すろは遠くつらなりて、大八洲のかためとなり、古のさくら木は、もろこしに陰をさし、南に羽うつ大鵬は、翼をこゝにやすめつべし、大比之小比之の山々を、かすかぎりなう重ねずは、いかで企て及ばめや、筑紫津輕に、眞名子をすゑて、鎮めとし、足高箱根かたへにさもらひて、ことある時のたすけとなる、怒りて炎を吐ときは、千里の外に石

をとばし、悦びてまゆを開く時は、萬戸の家に玉を降らす、ある時は、鹿の子まだらとなり、又ある時は、さかしまの扇となる、其名世界にしるくして、はめたゞへたる詩歌をば、積みかさぬればいとふとき、榎木もためにをれつべく、曳せたらむには、勇壯の牛といへどもあへぐべし、うち日さす都はいふもさらなり、天さかる鄙の浦々足引の山より、奥に住む人も、すがたを寫し壁にかけ、君を祝ひ世を祈る、まゐるしとなして夢にも見、うつゝに詠め身のさちを、蒙むらむことをはりするは、豈はおぼろげの山ならめやも、

○俊寛

初 段

あだまもる、筑紫のはての薩摩瀧、鬼界が島のあら磯に、治承元年夏五月、流され給ひし人々は、右近衛の少將成經、檢非違使平の入道康頼、法勝寺

の執行、俊寛僧都の三人なり、うき艱難を此島に送り給ふ其うちには、大赦の令をそ傳へらる、思ひもかけぬことなれば、おらありがたき御説やど、三人ひとしくひざまづき、うや／＼しくも令狀を、押戴きて成経は、うれしき涙に袖ぬれて、壁もふるへてさら／＼と、讀得給はぬ形勢を、康頼取りてやう／＼に、よみおけたまふ趣きは、このたび中宮、御産の御所禱に、非常の大赦、行はるゝにより、鬼界が島流人のうち、成経康頼を赦免すと、讀給ふ時俊寛は、おつと驚きかしらを揚、何とて某が名を、讀落し給ふぞと、言葉せはしく問給へば、康頼も、打驚きて壁うるみ、實にいふかしきことなれど、御名は更に見え侍らず、俊寛聞て、扱は筆者のあやまりか、今ひとたび、よませ給へどありけるを、使の元康すゝみより、某都にて承り候も、成経康頼のふたりは御供いたせ、俊寛ひとり此島に、殘し申せどの御事なり、嗚呼こは如何に何事ぞ、罪も同じく配所も同じ、非常も同じ大

赦なるに、獨り誓ひのおみにもれ、沈むは何の因果そや、げふまでは、三人一所ありてすら、さもおそろしくすさまじき、荒磯島に只ひとり、離れて海士の捨草の、浪のもくづにあらねども、よるべもえらぬうき身やど、歎くにかひもなきさなる、千鳥と共に鳴ばかり、思ひにあまる俊寛は、さきに讀たる巻物を、いくたびとなく打開き、おどくりかへし見給へど、成経康頼とあるばかりにて、僧都とも俊寛とも、かける文字は更になし、こは又夢かまぼろしか、夢ならば、さめよ／＼とのたまひて、獨り涙にくれたまふ、

玉兎晝眠、雲母地、金鷄夜宿、不萌枝、寒蟬抱古木、鳴盡不回頭、
といふ詩の心は、俊寛僧都の身の上と、今こそ思ひまられけれ、

二段

去程に、時刻うつりてかなはじと、榊子の言葉にせかれ來て、名殘は更に

つきねども、成経は夜の裳を、康頼は法華經一卷を、各かた見に残し置き、
 さまぐらなぐさめ参らせて、船にのらむとし給ふを、俊寛袂にすがりつ
 つ、元康聲をあらうげて、僧都は叶ふまじといひ放つ、嗚呼うたでやな公
 の私といふことあれば、せめてはむかひの地までなりとも、情にのせて
 つれ給へど、涙を袖につゝみかね、のたまふ聲の終らぬに、哀れや無情の
 梶子どもが櫓を振揚うたむとす、俊寛今は、叶はじとや思ひけむ、すが
 る袂の手を放ち、一時は宿に歸らむと、腫はあとにかへせども、かへらむ
 ものは心にて、梶子の無情も元康の、怒る言葉も打忘れ、又立寄りて出船
 の綱にとり付引とむる、梶子ども綱をおしきつて、船をふかみに押いだ
 す、せむかた浪にをどりこみ、船よ〜と呼ばれど、かへす摸樣もあらざ
 れば、ちから及ばず俊寛は、もとの渚にひれふして、彼の松浦さよ姫の、歌
 きもわれに及ばじと、悲しみ給ふもあはれなり、時を感じては、花にも涙

をろゝき、別れををしみては、鳥にも心を動かすといふことあれば、人ど
 して、ながき別れの悲しみを、えらぬものころなかるらめ、されば成経も
 康頼も、涙ながらにさし招き、われら都にのぼりなば、善やうに取りなし
 て、やけて御迎に参るべし、心強く待たまへと、宣ふ聲もかすかなる、たの
 みを濱のまつかげに、聞やいかにとゆふ浪の、よするまに〜俊寛は、只
 手を合せ頼むそと、呼はる聲も呼聲も、次第〜に遠ざかる、船もかすか
 に人かげも消えて見えなく成にけり、消て見ぬなくなりけり、

○阿新

初 段

日野中納言、藤原の資朝卿は、後醍醐帝の密旨を奉じ、北條高時をはろば
 して、大御心をやすめむと思ひをこらし給ひけり、茲に土岐の頼員は、此
 資朝卿と、一味のちかひたてあがら、妻に心のひかされて、ある夜のむつ

ことに、くちばしりーが基にて、事たちまちに六波羅へ洩れきこわしか
 ば高時は、まばしも猶豫なまばころ、資朝卿を佐渡といふ、遠き島根に流
 しけれ、いたはしや、資朝卿の御子阿新丸は、世にもかしこき母君と、仁和
 寺あたりのかくれ家に、住せ給ひて世の中の、無常を深くかこちつゝ、ま
 たの逢ふ瀬をたのしみに、指折かそへ待給ふ、其甲斐もなく高時は、長崎
 高資の言葉を容れ、佐渡の守護、本間山城入道に下知をなし、資朝卿を殺
 さむと、いふ企を傳へ聞くと、阿新丸は此時、十三才にてましませと、親をお
 ぼす真心は、いはほも通す桑のゆみ、なき敷にいる父上の、其御最後を見
 届て、共に冥土の旅まくら、結ばむものと思ひたち、突然母君に此事を、お
 かし給へば母君は、聲ふるはして涙ぐみ、わすれもやらぬ去年の夏、御父
 君につれなくも、別れまつりし其後は、御身ひとり、を此家の、杖柱ともお
 もへるに、今又御身と別れては、此母親が、生ながらふべくも思はへず、ま

してや佐渡とやらむは、人も通はぬ怖ろしき、離れ島根ときこゆるを、幼
 き御身いかゞして、行べきたよりのあるべきを、思ひとゞまり給へよと
 宣ふうちに御聲は、涙の雨に打しめり、きぬのたもとも見るうちに、まば
 るばかりに成にけり、阿新丸はきこしめし、思愛深き母君の、仰せにうむ
 くも不孝あり、又父上の御最後に、おくれ申も不孝なり、嗚呼母君に仕へ
 むか、御父君をいかにせむ、御父君に仕へむか、御母君をいかにせむ、いつ
 れにしても、両親に、孝を全ふすることは、とても叶はぬ此身なり、今宵の
 うちに自害して、御詫申す外はなしと、をさな心のひとすちに、おもひ詰
 たるありさまを、此方にいませ母君は、とく見そなはし此上に、いたくと
 めなばまのあたり、又憂目をや見るらむと、思ひかへして、さきくは、
 鬼にも角にも阿新が、望みにまかせおかむとて、心きゝたる中間を、差添
 られてかくれがを、いでませ君がうしろ影、見送る慈母のかなしみは、な

かゝ筆につくされず、昔時めく御家も、今は乗べき駒さへも、おらぬ歎きを打すて、はきもならはぬ草鞋に、菅の小笠を傾けて、露はをかねど草枕思はぬ旅に出給ふ、心の中こそ殊勝なれ。

二 段

去程に阿新丸は、やがて越前の敦賀より、船にめされて海原の、八重の汐路を打渡り、佐渡の國にそ着給ふ、たよる家とてあらざれば、本間が館におどづれて、某は日野中納言資朝の一子にて、阿新丸といふものなり、父が此世にいますうち逢ひ見むものと玉敷の都をいで、足引のけはしき山も海神の、いかる浪路もはぐからず、はるく越て此佐渡に、まかり下りしおはれさを、聞わけられて對面をゆるし給へど、懇に、くりかへしつゝ、宣へど、本間なかゝ、聞入ず、資朝卿をいれおさし、牢屋のうちを目の前に、僅へたて、こなたなる持佛堂に、そいれにける、資朝卿は此こと

を、きこしめされて打しはれ、生て逢ふこと叶はずは、死して、千草の葉がくれに、ひとりまろびて思ひ寐の、夢に見もせむ逢もせむと、悲しみ給ふ御すがた、よろの見る目もあはれなり、扱日も西に入相の、鐘の響ともろどもに、行水を奉れば、資朝卿は、最後の時になりぬとて、用意の駕籠に、そめされける、爰より十丁ばかりを隔たる、さびしき河原のありけるが、程よき所に人夫らが、駕籠昇すゑて、扣ふれば、資朝卿、し給ふ氣色なく、敷皮の上に居直りて、辭世の頰を、そかゝせ給ふ。

五蘊假成形、四大今歸空、將首當白刃、截斷一陣風、

其奥に、嘉暦元年五月二十九日、日野中納言藤原資朝と、記させ給ふやいなや、河原のあしに身をこがす、はたるの影は、太刀風に、さつと散りて、そうせにける、やゝありて御なきがらを、阿新丸に奉れば、阿新丸ひと目見給ひて、足手もなへて倒れ伏し、嗚呼情なき本間かな、海山越てはるく

と、來りしわれに告もせで、なきがらばかりあたへしは、かへすくも口
をしと、御袖顔に赤てたまひ、まばし人目も憚からず、泣ふし給ふありさ
まは、實にことばりとまられけり、暫くありて身を起し、無念のなみだ押
拭ひ、めし使ひたる中間に、其なきがらを守らせて、高野山に送りつゝ、御
身はあどに留りて、思ひにしづみ給ひしは、これ又深き所存のあること
ゝのちにぞ思ひしられる、

三 段

去程に阿新丸は其辭憤を晴さむと、ひるは病といつはりて、旅のころも
をまきたへの床にふしてぞ忍ばるゝ、夜はひろかに起いで、本間がね
やを伺ひ給ひ、隙もあらば親子のうち、ひとりたりとも刺殺し、腹を切ら
むと思ひ詰め、まのびくゝておはせしが、ある夜あめかせはげしくて、番
の者ども油断をなし、おもひくゝにいねければ、願ふ所の幸ひと、いさむ

心を押し沈め、つと伺ひ見給ふに、本間が運や強かりけむ、常のふしを
をかへたれば、廻輿深くしのびいり、さがし給ふにふたまなる、奥にあたり
て燈火の影明らかに見えなれば、板戸の外に身をちぢめ、首さしのばし
見給ふに、目ざすかたぎにあらずして、資朝卿を斬たりし、本間三郎にて
ありければ、案外なれど是も又、時にとりてのかたぎなり、あるじの入道
にまさるとも、よもや劣りはいたさじと、ふた足三足すゝみより、息をこ
らして立給ふも、どより腰に太刀はなし、殊にどもしびあかければ、千にひ
どつとも目をさまし、聲たてられては、一大事いかゞはせむと腕をくみ、案
じわづらひ給ひしが、折節夏の事なれば、蛾といふ虫が燈火の影を慕ひ
て飛くるを、うちにいれむと思ひつゝ、障子を少し明給へば、あたりまば
ゆきどもしびの、光はつひに虫のため、消てあどなく成にけり、仕済した
りと思ひつゝ、かれが所持なす一刀を、とるより早く抜き放ち、首落さむ

としまひしが、いねたる人をうたむこと、死人を斬るにことあらず、目をさませせて刺むとて、足踏ならし立掛り、はたと蹴放す小枕の音に驚き起ぬがる、本間がうへにまたがりて、胸のうへよりたゞみまで、柄も拳もとはれよと、力にまかせ指通し、かへす太刀にて喉笛を、心のまゝに掻きつて、うしろにあたる竹村の、うちを目掛けて、まづ―と、かくれ給ひしふるまひは、實にを、敷ぞ見えにける、

四 段

去程に番の者はこのおとに驚かされて、狼狽し、とるものもとりあへず、馳あつまりて燈火を、どぼして見ればこはいかに、をさなき人の足あと、は、阿新どのに相違なし、いさ打せらむと、松明をかざして庭のすみまで、も、さがせと影もみとめ得ず、阿新九は、人手に渡らぬ其さきに、自害せむとは仕給へと、まださき―に望みある、身の上なれば今こゝを、のがれ

て帝の御馬前に、功名手がらあらはして、父の宿意も達しなば、是こそ忠臣孝子なれど、思ひ返してふる雨に、ぬれてなびける、呉竹の、枝にすがりてやうやうと、高き梢によちのぼり、目におまりたる大堀を、やす―越えて鳥羽玉の、夜はまだ深き牛寅の、ころはひなれば幸ひと、磯邊のかたを心掛、たどり給へと夏之夜は、まだ宵ながら、あけぬるを、雲のいつこに、月やさるらむと、謠ひし如く横雲は、はや遠山の端にあけ離れ、見あらはされぬ其ひまに、麻や蓬のまげりたる、ふかみがなかに身をかくし、追手のがれ給ひけり、終に其日も暮ければ、又忍びいで行給ふ、そりがら神も孝行の志をや感じ給ひけむ、いたく老たる山伏に、はたと行違ひまかしかど、事の子細を宣へば、山伏聞て哀れに思ひ、御心やすくおぼしめせど、足もたゆめる阿新九を、肩にかきのせ足ばやに、ゆけば程なくあら磯の、浪打際に出にけり、遙の沖を見渡せば、今もや船の出なむと、するを手を

あげさし招き呼はりけれと楫子共は更に是をば耳にせず、楫擡を立て
 漕いだす、山伏大よはらをとて、柿のころもを結びあげ、漕行船に立むか
 ひ、いらたか數珠をさらし、と音もはげしく押揉て、秘密の呪文をとな
 へ、明王の本誓誤らずば、權現、金剛童子、天龍夜刃、八大龍王、其船こなたへ
 返し給へと、肝膽をくだきつゝ、をどりあがりて、祈ければ、其念力や通じ
 けむ、俄かに逆風吹起り、逆巻なみに大船も、くつがへらむとする形勢に、
 楫子ども大に恐をなし、山伏の御房、助け給へと、手を合せ、膝をかゝめて
 伏し拜み、船をなぎさに漕戻す、左ころあらめと山伏は、阿新九を助けあ
 げ、水主の乞にまかせつゝ、屋形のうちに入れれば、波風忽ちしづまりて、
 船は湊を出にけり、此時きのふの追手ども、百四五十騎馳來り、其船戻せ
 と鞭を揚、皆同音に呼はれと、順風に帆をあげて、はせ行船のことなれば、
 見る／＼影もきえうせて、船は其日の夕まぐれ、越後の府にぞ着にける、

嗚呼阿新九の眞心は、天津みろりの月と日の、光がと共にあかねさす、我
 日の本にかゞやけり、我日の本に輝けり、

○楠公

初 段

延元元年五月のはじめ、足利尊氏同左馬頭直義、大勢を引率し、都へ攻の
 ぼる趣、新田左中將義貞、急使をもつて奏聞ありければ、宸襟もつともや
 すからず、楠判官正成をめされ、急き兵庫へ下向して、義貞にちからを合
 せ、合戦すべしと仰せらる、正成かしてまりて、奏聞しけるやう、尊氏すで
 に、筑紫九か國の勢を率ゐ、上洛することなれば、さだめて勢は、雲霧の如
 に、そ候はむ、味方の疲れ果たる小勢にて、機に乗りたる大勢にかけあは
 せ、尋の常の如くに戦はむ、味かたの敗北は、鏡にかけて見る如し、急き新
 田をめさせられ、前の如く山門へ、御臨幸在らせらるべし、まからは正成

も河内へくだり、畿内の勢をもつて、河尻をさし塞ぎ、尊氏をみやこへす
ゝませて、双方より、兵糧の道を断ちきらば、敵は次第に衰へて、味方
は日々に集るべし、此機に乘し、新田は大手より押よせ、正成は搦手より
攻のぼらは、朝敵を一戦にほろぼさむ事、何の疑か候ふべき、新田も此所
存とは、存じ候得とも、敵を眼のあたりに受ながら、軍もせで引揚むこと、
人のおもはくもいかゞあらむと、終に兵庫にさゝへしならむ、合戦は兎
も角も、軍は始終の勝ころ肝要なれ、能々敵慮を廻らされ、公議を定めら
るべしと、奏聞ありければ、坊門の宰相清忠進みいで、申さるゝやう、正
成の言ふところ、うのいはれなきにもあらざれども、征討のために、差下
されたる節度使が、いまだ戦をせざるさきに、帝都をすて、一年のうち兩
度迄、山門へ御幸あらせられむこと、一は帝位の輕きに似、一は官軍の道
を失ふなり、たとひ尊氏、筑紫の勢を率ゐ、上洛すとも、昨年東八ヶ國の兵

をまたがへて、のぼりしどきの勢にはよもすぎじ、凡そ戦の初めより、味
方の小勢をもつて、敵の大勢を、攻なやましたるはいくたびぞ、是武畧の
すむれたるにあらずして、全く聖運の、天に叶ひしゆゑむなり、まからば
戦を、帝都の外に決し、敵を鉄鉞の下に、ほろぼさむこと、何の子細かある
べきぞ、只時をたがへず、正成を差下されむころ、まかるべけれど、奏聞あ
りければ、公議これに定まりて、其旨勅諭あらせらる、正成は最早せむか
たなしと、屈竟の精兵、五百餘騎をしたがへて、五月十六日に都を立て、急
き兵庫へぞ下りける、

爰にまた正成の一子正行は、今年十一歳なれども、父の決意を察せしに
や、何處までも従ひ行、正成思ふ所存のありければ、櫻井の宿におひて、
正行を膝元ちかくめしよせて、つくづく教へさどされけるは、彼の獅子
といふ猛獸は、子を産みて三日をすぐるにあたり、數千丈の絶壁より、谷

底深く擲落す、其子獅子の器量あれば、ちゆうより刻かへりて、死せずといへり、況むやなむぢは、人界に生を得て、既に十一歳にもなりぬれば、父がをしへは守るべし、此たびの合戦は、天下安危の定まるどころ、われ討死せむ其後は、尊氏天下に縦横し、敵慮を惱まし奉らむ、汝正行、其不義の勢ひに恐れ、身命を助からむため、多年の忠烈をすて、かれに服従することなかれ、一族郎黨の一人たりとも、生きながらへてあるならば、金剛山に引こもり、敵よせきたらば、命ちを由基が矢先に掛、義を紀信が忠に比し、一歩も退くことなかれ、此肌のままよりは、ひとせ都攻のありし時、かたじけなくも帝より下し賜ひし綸旨なり、今は是をば讓るべし、父が志を継ぎ、帝に忠義をつくしなば、是を親への孝行と申し含めて正行の類のあたり、手をあて、是が此世の見終めと、おもへば、猛き大丈夫の、心もいまはみだれがみ、かきあげつゝも、いくたびか、ふりかへり見てなく

くも、名残をしげに別れける、世の盛衰を觀察し、一子を獲して、無き跡までの義を勤むる、心のうちこそ殊勝なれ、

二段

時しも五月二十五日、煙波渺々たる海の面、十四五里がほどに、數萬の兵船帆をあげて寄きたる、かゝる所に、須磨の上野と鹿松の岡、鶴越の方より、ふたつ引兩、四ツ目結び、左り巴どうの旗、五六百旗、朝の嵐にひるがへし、雲霞の如くに寄かけたり、正成これを見て、舍弟帶刀正季に申さるゝやう、敵海陸をさへざりて、味方は陣を隔てたり、今はのがれぬところなり、まづ前なる敵を追まくり、うしろの敵と戦む、正季これを承り、我手七百餘騎を前後にうなへ、大勢の中へ割て入る、直義の兵ものども、菊水の旗を見て、能き敵なりと思ひければ、取りこめて討むとしければ、正成正季東より西へ切て通り、北より南へ追なひけ、能き敵と見受れば、馳な

らへ、組んで落ては首を取り、雑兵の奴輩は、ひと太刀打てかけちらす、正成と正季と、七たび合て七たびわかる、其心偏に直義にちかづき、組て討ひと思ふにあり、遂に直義の五十萬騎は、正成の、七百餘騎に切立られて、又須磨の、上野の方へそ引かへす、直義の乗たる馬は、鉄を蹄に踏たて、ひるむ所を、正成の軍兵ども是を見て、いざ討とらむと駈よるを、薬師寺十郎次郎只一騎、蓮池の堤にてとつてかへし、駒より飛で下り、長刀の石突をとりのべて、よせくる敵の馬のひらくび、ひながひの引廻し等、切ては、刎倒し、倒しては、剣またくひまに、七八騎は、切て落す、其ひまに、直義は駒を乗かへて、やうく落のび得たりけり、尋氏此よしを見て、荒手を入れかへて、直義をうたすあと下知すれば、吉良、石堂、高、上杉の人々、六千餘騎にて、湊川の東へ駈出、おとを切らむと取り巻たり、正成正季、又取てかへし、此勢に渡り合せ、うちつうたれつ、火花をちらして戦へど、軍兵

ども、其身鐵石にあらざれば、次第く打死し、残るは僅七十三騎なり、此小勢にても敵を打破り、落なば落へかりけるを、正成都を出る日に、思ひ定めしことあれば、皆討死と覺悟して、湊川の北にあたりし一と村へ、七十三騎引揚て、やすらふうちに一族は、軍兵どもともろ共に、腹掻切て、そうせにける、正成正季に申さる、やう、うも、最後の一念に、依善惡の生を引といへり、九界のあひだに、いづれか願なると問ひければ、正季打笑ひ、な、たび人間に生れ來て、朝敵をはろばさばやとこそ、存候へと申ければ、正成世にうれしげなる氣色にて、罪業深き惡念なれ共、我も左やうに思ふなり、いざさらば、同じく生をかへ、此本懐を達せむと誓て、兄弟差ちかへ、一ツ枕に伏されけり、嗚呼此最後こそ、實に武士の體みなれ、嗚呼此最後こそ、實にものふのかみなれ、

薩摩歌藪驚初篇終

薩摩歌藪驚二篇

薩摩國人 正八位吉水經和著作

○雲のまかさ

國の爲には身をわすれ、月や花よは意もどめぬ、頼三樹三郎は幼にして、父をうしなひ其母に、うだてられつゝ人となり、十七歳にて、浪花なる、後藤松蔭に従ひて、ふみの林の奥深く、道より道にわけ入て、吾妻に遊ぶ程もなく、高き其名は天地に響き渡りし人なるが、嘉永六年亞米利加の使節浦賀に渡り來て、碇おろし、其日より、磯打浪の音すらも、いと騒がしくおもわれ、皇國のうちはさながらに、鼎の湧に異ならず、三樹三郎おもふやう、糧にとぼしき此都、若しも軍の起りなは、軍兵共を初めとし、人皆うるゑに及ぶべし、いさまつ糧を求めむと、同じ心の人々に、謀りし、とも

鳥か鳴吾妻の司つかさどに支たすへられ、つくす心は鴨川の、水の泡と成にける、三樹三郎みつとせ牙をかみ、

我罪は君か代思ふ、真心の深からさりし、まゐるし也けり、と墨黒々と書流し、持たる筆を突き碎き、天をにらみて立あがる、早此時はかけまくも、かしてさあたりは浦々の、港を鎖しえみしらを、追ひ拂はむと唱へられ、幕府は彼か請を容れ、かたみに市を開かむと、いひ争へり、公論は、二つに別れ夏の日、蟬の聲よりかまびすし、魯英其他の強國も、われおとらじと波を蹴り、押寄せ來れば三樹三郎、今は猶豫もなしかねて、粟田口の親王に、夜盡となく討幕の事を細かにすゝめしが、小簾間洩るゝは月花をかたらふ聲にあらすとて、吾妻の司いち早く、からめとりてぞ江戸に送る、三樹三郎は途すがら、かへり見る、比惠の山影、曇りけり、我行先は、白雲のそら、

と口吟くちがみつゝなれし、都をはなれ山駕籠にかゝれ行ころあはれなれ、嗚呼くもりなき大空の、月の光もともすれば、霞にかくれかくはしき花のさかりも時の間に、夜半の嵐に誘はれて、散るぞ浮世の習ひなる、三樹三郎も、今は早運つたなくてめしうどの、數には入れぬ真心は、わが日の本の行するを、おもひ〜て玉と散る、涙は袖にふる雨と、共にかゝりて旅ころも、はすいとまへなきうち、いつか箱根になりぬれば、

當年意氣欲凌雲、快馬東馳不見山、今日送途春雨冷、轎車搖夢渡、

函開

と吟する聲の雄々しさに、附き添ふ人も恐れつゝ、名に逢ふ關もことなくて、越ゆるともなく越にけり、隙行駒のあし早く、吾妻の方に着ければ、獄吏さびしくいまして、より〜罪を問ひ糺す、三樹三郎をばげまして、我は父の遺訓をまもり、只一と筋に勤王の志をばいだくのみ、なむちら

心にかへり見て、早く眠をさますは、たちどころにはろばして、すめら
御國を清めむと、諫め争ふ其聲は、文天祥が其むかし、折れすたわまぬ勢
ひも、かくありけむとおもはれて、八田知紀が詠したる、

足引の山もさくべき聲すあり、月の桂も、いまか散るらむ、

といへる心も目のまへに見る心地して、勇ましき、扱此人をゆるしては、
風もろよがぬ武藏野に、虎を放つに異ならず、とくなきものになさむと
て、拔手も早き太刀先の、きらめくさは、冬枯の、淺茅か原の草の葉にお
く霜よりも尙白し、三樹容ちをあらためて、都の方を伏しをけみ、

排雲欲手掃天際、失脚墜來江戸城、井底、痴蛙過憂慮、天邊、大月缺、

光明、身臨鼎鏝家無信、夢斬鯨鯢劍有聲、風雨多年苔石面、離題、

日本古狂生、

と吟し終るや、神無月、時雨に染みし紅葉の、たぐひならねと、大丈夫が散

りて行こそかなしけれ、ころは安政つちのどのひつし、十月七日のとな
りき、惜むへし年は三十五、照る日も爲にかきくもり、さへたる月も光り
なし、

◎送別

あかねさすわが日の本に人といふ、人のうちより撰まれて、海原とはく
浦々の浪の花咲く異國に、渡り行なる君が名と、はまれば世々に残るら
む、茲に船出を祝はむと、心をこめて足引の山にも、狩り得海に釣川にす
などり野に求め、猶あきたらで、風を裂麟を屠りて、盃を勸むるうちにか
たへより、吟ずる聲のたからかに、

渭城、長雨濕輕塵、客舍青々柳色新、勸君更盡一杯酒、西出陽關無

故人、

古きしらへの唐うたに、思ひをよせて別れをば、をしむ心もなつかしく、

皆とりくりに又酒を勸めて興をぞ添にける暫くありて一同にさかつ
きさ上げ起立して君萬歳と唱へけり君萬歳と唱へけり

○櫻狩

霞棚引やましのさかりの花を詠むといななく駒に鞍おかせ東雲近く
麻茅生の芝の庵を只ひとりねぐら放れしうぐひすの聲を聞つゝ春の
野にもゆる草葉の露わけてすゝむる駒のたてがみにみだれかゝれる
青柳の糸を傳ふて朝風の吹ともなしにゆかし香をおくりてわれをさ
ろふかと思ふばかりに遠近の梢は雪か白雲か景色妙なる其さまにう
さ世の善悪も打忘れしばし木陰に立よりて矢たての筆をとりあへず
薄命能伸旬日壽 納言姓宇胃斯花 零丁借宿平忠度 吟詠恨風源
義家 志賀浦荒鷲暖雪 奈良都古篋香塵 南朝 天子今何在 欽
望芳山路更賒

とかきつゞけたる水莖を跡に残して花の香を風のまに〜とめくれ
ばこゝは盛をはやすぎてちりしく花は野に畑に飛びかふ蝶の如くあ
り嗚呼世の中はうば玉の夢かうつゝかきのふまで榮おしものゝけふ
は早見る影もなく成り果てうき世の中とかこちつゝ今更それとゆふ
ぐれの鐘の音さへ身にしみて昔をしのぶ人もあらむ左は去ながら花
の木も又こむ春よめぐりあひまづしき人もいつまでか時めく時のな
からめや榮枯盛衰は世の習ひ只玉鐙の道理をたどらむ外はなかりけ
りいざ歸らむと乗る駒の手綱かひくる其袖よ花のふゞきはかゝりけ
り花のふゞきはかゝりけり

○怨の雪

四の緒にしらべ合せて奏づるもいと涙の種となるむかし語をたづ
ぬれば今より七十餘年前西のはてなる異國に母子ふたりが雪のため

往來もならで其母が、むなしく屍を埋めたる、いともかなしき物がたり、
 あやめもわかぬ烏羽玉の、やみ夜に道をふみたがへ、はてもなきまでい
 と廣き野原に迷ひ出しより、空かきくらし降る雪に、左も右もあどさき
 も、皆しろかねの世となりて、木々の梢は時ならぬ、花をちらして木枯の、
 音すさまじく身にしみて、骨も砕けむばかりなり、玉と散りくる傘の雪、
 拂へどつもる身の因果次第、に夜は更て、膚も凍り手も足も、かなは
 ぬ時の神頼み、今は命もたぬ、に、なりたる聲をしぼりあげ、助けたま
 はれ神々よ、たとひ妾は死ぬるとも、この見はまもり給へよと、いひつゝ
 着物ぬぎとりて、かはゆき我兒の身にまどふ、雛を羽圍む夜の鶴、燒野の
 雉子のつばさより、あたゝかなりき母の恩、しるやしらすやをさなては、
 眠れど母が玉の緒は、絶えて最愛親と子が、ながき別れとなりひゞく、遠
 寺の鐘はそれとなく、諸業無常と告渡る、おくるおしたに旅びどが、雪か

きわけてたどり行道に黄金の髪かみの毛けのみだれしまゝに子をいただき、ひ
 とりの女をとめたふれ伏す、立寄見ればうつくしき花の姿は、残れども、浮世の
 夢は痕あともなし、扱つか此夫は誰なるか、聞かばさそかし、歎くらむ、彼はおもひ
 あはすれば、なみだは袖の關越せきごて、落る下より餘念なき、小見は見あげ打
 笑わらみて、我母なりとや思ひけむ、かひでの如き手をだして、乳房ちちうぶをさぐる
 其さまは、胸も張りさくばかりなり、嗚呼親子のあはれさを、語るまにま
 に四の緒の半ななの月も曇りけり、なかバの月もくもりけり、

芙蓉峯

吳竹ごたけの世にさからはす、隙容ひます、高たかくろびえて、動かぬは、我日の本の富士
 の山、あらびあらぶる神かみかせも、吹倒ふきたし得ず、岩かねを、砕くだかむ雨も、流し得
 ず、嚴然たる其氣象、凛りん乎こたる其威儀を、仰あやく、慷慨悲憤の士拳しこぶしを、握にぎり牙かみ
 かみ、我は人なり此さまに、なごか劣よむ大御代の、事なき時に此氣象、養やしなひ

おきて我國に警なす醜夷のある時は、腰間三尺の秋水をぬぐ手も見せず切り拂ひ進んで彼れが名にはこる、ソラタ山なりエトナ山、苦もなく取て我富士の眞名子となしてくれむそと、日本橋頭に駒をたて、富山をにらむありさまは、實に雄々敷を見ゆにける、嗚呼此英氣を鼓舞せしは、ひとへにふしの徳とかや、ひとへに富士の徳とかや、

◎吉野落

初 段

みよし野の花も立田のもみち葉も、夜半のあらしにさらはれて、おだにちりゆく時はまた増しておはれにおもふなり、茲に二階堂出羽の入道道蘊は、元弘三年正月に六萬餘騎をしたかへて、大塔の宮のひころより、籠らせ給ふやまとなる、吉野の城にぞ攻よする、茶摘川のほとりより、芳野のかたを見上れば、白旗赤旗錦の旗、深山おろしよ打なびき雲か花かど

あやしまれふもどには、敵の大勢すきまなく、甲の星をかゞやかし、鎧の袖をつらねしは、錦をしくにことならず、峯高ふして道はろく、山嶮うして昔なめらかなり、幾千萬の銳兵か、必死になりてせむるとも、たやすく落べしどもおもはぬす、かゝる所に同く十八日卯の刻より、兩陣鯨波をせつとあげ、敵攻のぼれば攻おろし、互に勇氣をふるひつゝ、この谷、かしこのみねにはせちりて、攻合ひ開き合ひ、射手をろろへて散々に射たてたれを、寄手の兵は、命ちをしらぬ、阪東武士親うたれても願みず、主倒れても取あはず、かばねを乗越し、七日があひだ、息をもつかず攻戦ふ、血は草芥を染め、屍は路頭に横たはる、かゝる所に、寄手の案内者岩菊丸は、足輕共に下知をなし、金峯山の嶮を越、木の根岩角攀のぼり、在々所々に火をかけて、鯨波を作りて攻ければ、城兵も今は前後の敵をふせぎかね、自害する者もあれば、猛火のうちにはせ入て死するもあり、向ふ敵と

引組でさしちがふる者もあれば、宮に注進する者もあり、大手の堀は忽ち死骸を以て埋めたり、宮は此よしをきこしめし、赤地のにしきの直垂に、火威の御鎧に、龍頭のかぶとをめさせられ、三尺五寸の小長刀を、脇にはさみて、屈竟の兵ものどもを二十餘人、前後左右にひき給ひ、群る敵に切て入り、砂子をどばし、煙をたて、東西を打拂ひ、南北へ追まはし、こゝを専途と戦ひ給へば、寄手の大勢も、此二十餘人に切たてられ、風に木の葉のちる如く、四方へ颯とひきにけり、宮はこれより藏王堂の大廣場にゆう／＼と引揚給ひて、軍兵と最後の御酒宴をそ遊ばされける、此戦ひに宮のめしたる御鎧は、七筋の矢につらぬかれ、頬先と二のうでに、二か所の突疵負せ給へど、立たる其矢もぬがせ給はず、流るゝ血汐も拭はせ給はず、敷皮の上に立ながら、大盃をみたひまで、かたむけ給へば、木寺の相摸、四尺三寸の太刀先に、敵の首をさし通し、宮の御前に、畏り、聲高らかに

に謠ふやう、戈鋌、劍戟を降らすこと、電光の如く、盤石、山岩を飛すこと、急雨の如しといへども、天帝の身には近づかず、却て修羅、彼が爲に破らるゝと、太刀振かざし舞たるは、漢楚の鴻門に、楚の項伯と項莊と、劍を抜て舞ひしとき、樊噲庭に立ながら、幕をかゝげて、項王を睨みしいきはひも、斯やとおぼゆるばかりなり、

二段

去程に、村上彦四郎、義光は、餘りはげしく戦ひて、敵に矢十六筋を射付られ、篋中の箭や袖摺のふしよりをれて立たるは、枯野に残る玉萩の風になびくが如くなり、其矢を抜にいとまなく、宮の御前にひれ伏して、一の木戸は早破れ、今二の木戸にて支ふれど、連日の戦に、軍兵共は打死し、とても籠城おぼつかなし、敵四方を圍まむうち、早く落させ給ふべし、臣は恐れ多き事ながら、めさせられたるひたゝれや、御物の具を頂戴し、御諱

をも犯しまわらせて、茲に戦死を仕らむと、忠義面にあらはれて、いと懇ろに申上れば、宮はあはれに思召し、いかでかさる事のあるべきぞ、死なば所をかへずして、吉野の山にかむばしき、名を残さむと宣へば、義光聞もあへず、嗚呼、淺間敷仰かな、昔し漢の高祖が、栗陽にかこまれし時、紀信高祖の眞似をなし、楚を欺かむと乞たりしに、高祖は是を許したり、これらの御覺悟あらせられずして、天下の大事を、能もおぼしたるれたり、早御物の具下し賜れど、御鎧のうはおびを解まづれば、宮も實にとやおぼしけむ、御鎧も直垂も、ぬがせ給ひて、義光に、手づから渡し宣ふやう、我若し生のびたらば、汝が後生を吊らはむ、又打死なしたらば、同じ冥土に伴ふべし、是今生の別れぞと、言葉すくなき宣ひて、涙ながらに落させ給ふ、義光も、せさくる涙を押しつゝ、木戸の櫓に走上り、大音揚て名乗るやう、われはこれ、神武天皇より九十六代の孫、今の帝の第三の皇子、一品兵部

卿、尊仁親王なり、逆臣ばらになやまさされ、恨を泉下にむくむため、只今自害する所なり、これを見てなむちらが、身に備へたる武運盡、腹をきらむ、其時の手本にせよと呼はりて、鎧をぬぎて、投げ落し、にしきのひたゝれに、練貫のふたへ小袖を引くつろげ、もろはだぬぎて、一刀を、左の腹へぐつとたて、眞一文字に引まはし、あけに染みたる脇を櫓の板に投げ付て、太刀先くはへうつ伏しに、伏して果たる義光が、最後のさまころ勇ましけれ、敵兵是を見て、大塔の宮は御自害めされたり、御首たまはらむといふまゝに、四方のかこみを打すて、櫓のもとに走あつまる、宮は是と引ちがへ、天の河へと落給ふに、敵五百餘騎、道をさへぎりければ、義光の一子、村上兵衛藏人、義隆は、父が教へにしたがひて、一人茲に踏とゞまり、追くる敵の馬の諸膝、薙ては切りすゑ、平頭打ては、刎落し、右へ突のけ左へ蹴倒し、飛蝶の如く飛まはり、猛虎の如くたけりたて、九打なるはろみ

ちに、五百餘騎を引受て、半時ばかり支へしが、いかに義隆、強の者とはいへ、身鐵石にあらざれば、深手の矢疵十餘か所、海手の疵は數しれず、今は是迄とや思ひけむ、とある竹村に走入て、腹掻切てぞうせにける、此ひまに、宮は虎口を遁れ給ひ、高野山へ落ち、仲ひ給ひしは、村上父子がみよし野の花とちりにし、其いさを、立田の秋のもみち葉の、赤き心によるとかや、あかさ心によるとかや、

○御夢の跡

初 段 後醍醐帝笠置山にて御夢の事

笠置の山は掛まくも、綾にかしこき大君の籠らせ給ふ城なれば、白雲峯に、柳引て、鐵根も高く聳えたり、梢を走るましらさへ、いかで容易昇るべき、山を固めて守りたる、大御軍は古の、聖の御代に引かへず、弓取なれば、六波羅は、恐れをのゝきやゝし、ばし、軍議に日を送りける、これより先

きに大君は、笠置の本堂にましゝて、暫しまどろませ給ふ時、紫宸殿の廣庭に、大なる常磐木のみどり映ある其うちに、南へ指たる大枝の、殊に榮えて見えけるが、其もとに、司位の次第に依り、百の公達居ならびて、南に向きたる上座は、たゝみを敷きて人は居す、あゝたがために設けたる、座席ならむと御夢の中にあやしみ給ふ時、嬋妍たる鬢の毛を、結び揚たるわらむべが、ふたり御前に、跪き、涙の袖にはらゝと、掛るを掩ひ口籠りて、四海の主に御在ます、御身をもつて暫くも、休ませ給ふ所なく、朝夕なに御心を、なやませ給ふは、殊更に、口をしき事に侍れど、暫しが間彼の陰に、しのばせ給ひて、聖運の開くる時を、指折て、御待遊ばし候へど、奏し終るや、わらむべの、姿は空に立昇り、消えはしつれと跡かたの、なくてはならぬ御夢の、さむる枕に、其文字をつらゝ案じ遊ばすに、木に南と書たるは、楠といふ字なり、又南にむかひ坐せよとて、わらは二人が示せ

しは、朕ふたゞ南面の徳を修めて群臣を朝せしめむとの相なりと、未頼母敷思召し、成就房の律師を召れ、若し此はどりに楠といふ侍ひやあると、御意あれば、律師畏り、近きあたりには承り候はねど、河内の國金剛山の西にあたり、楠多門兵衛正成とて、名を得たる弓取あり、是は敏達天皇四代の孫、井手の左大臣橘の諸兄公の後胤にて、事まめやかなる武士と、御答へ申上げれば、扱は夫ぞと思召し、萬里小路中納言藤房卿に仰せられ、急ぎ正成をそ召れける、正成弓矢取る身の面目なりと、時刻を移さすまいのばり、其まゝ階下にひれふせば、威感殊に淺ならず、抑今の形勢如何なる謀をめぐらして、賊を平らげ太平の代となすべきや、今茲に所存をつゝます奏せよと、藤房卿を以て仰せ出されければ、正成畏て奏するやう、逆賊暴威を逞し、君を蔑ろにするからは、天誅いかでか遁れむや、夫戦は、武畧と智謀とにより候へば、味方小勢なりとて、臆するに及ば

す、敵大勢あればとて、怖るゝに足り申さす、假令逆賊六十餘州の兵ものを集め來りて攻むるとも、離合常なき烏合の兵、欺くにやすくして破るにかたからず、さはさりながら、一時の勝敗は武門の常、すこしの勝敗を以てかしくも、大御心を動かさ給はむには、とても成功覺束なし、正成生てあらむ限りは、龍駕再び玉敷の都へかへし申さむと、いと懇ろに言上し、河内を指てぞ歸りける、

二段 笠置の城攻の事

去程に、六波羅方に於ては、佐々木判官時信に、近江一ヶ國の軍勢と、久下長澤の一族を、八百餘人差添て、笠置の寄手に向はしむ、六波羅の兩檢斷、糟谷三郎宗秋、隅田次郎左衛門、五百餘騎にて、宇治の平等院に打ていで、軍勢を點檢するに、催促もまたす馳集る者十餘萬、翌日戦を始めむと、軍の評定をなしけるに、高橋又四郎とて、逸り雄の士ひあり、先懸をして高

名をあらわさむとや思ひけむ、吾手三百餘騎を従へて、城の麓に寄けるを、官軍打見て一搦にもみ砕かむと云ふまなく、三千餘騎の精兵が、木津川のほとりに折合て、短兵急に伐りまくれば、寄手の三百餘騎、皆ちりちりに打なされ、生きてかへる者ひとりもなし、又四郎は始めの勢ひに似もやらず、跡を見ずして、只一騎、捨頼加へて逃て行、小早川某入り替り、我こそ高名せめと、威丈高になつて押よすれど、是又残りすくなに打なされ、もとの宇治にぞ引にける、さしもに清き木津川の流ればいつかくれなぬの色と替りて、紅葉の、した行水にことならず、官軍初度の戦に、敵を挫きて勇み立、勝鯨波とつと擧げれば、糟谷隅田の兩檢斷、氣も魂もうつせみの、もぬけ果たる心地して、前後もしらで居たりしが、やうく心を勵まして、軍旅の手配をぞ始めける、先づ東の手には、東海道十五ヶ國の内、伊賀伊勢等の勢、二萬五千餘騎、西の手には、山陽道八ヶ國の勢、三萬二

千餘騎、南の手には、五畿内五ヶ國の勢、七千六百餘騎、北の手には、山陰道八ヶ國の勢、一萬二千餘騎、笠置の山の四方二三里が間、寸地も餘さず固めしは、元弘元年九月二日なり、扱其翌日卯の刻より、四方の寄手一同は、天地も動かむばかりなる、鯨波を作て流鏑矢を、あめより茂げく射掛たれど、城中は静まりかへりて音もなし、寄手大に悦びて、城兵は早落行たり、いさ驅上れど、諸軍勢に下知をなし、一の木戸まで構こと、實上りしが、白雲の上より見ゆる月と日の、錦の御旗山風に、打なびきたる其下に、いとも堅固に鍛ふたる、屈竟の兵ものども三千餘人、櫓の上には、矢繼早の達人共、弓弦つま引扣へたり、寄手は、案に相違して、前には大敵あり、前まむとするも前されず、後ろは味方押し昇り、退むとするも退けず、進退茲に谷まりて、途方に暮てそ居たりける、

三 段 足助次郎の弓勢荒尾兄弟を倒す事

去程に、櫓の板を押排き、某は三河の國の住人、足助次郎重範と云者なり、
 恐れ多くも萬乗の君をば守護し奉り、此一の木戸に堅めたり、前陣にす
 べられたるは、美濃尾張の人々と見受たり、一天の主のおはします、此城
 なればいはずとも、六波羅殿のみづからに、御向ひ候はむと、大和鍛冶の
 鎌たる鐵を茲に梓弓、引出物に參らせむと、少々用意致したり、一筋受て
 其味を御ためしあれといふ儘に、三人張の弓に十三束、三伏の籠を打番
 ひ、かねにたがはず引絞り、暫しかためて切て放つ、其矢遙かなる、谷を隔
 て、扣へたる、荒尾九郎がいかめしく、着たる鎧の千檀の板を碎きて小
 脇まで、籠深にくさど射込たり、一と箭なれども、究竟の矢坪にてありけ
 れは、何かは以てたへ得べき、眞倒に落馬して、聲も得たてすうせにけり、
 舍弟彌五郎此様を、敵に見せじと走り寄り、死體の前に立おらはれ、足助
 殿の御弓勢、日ころ聞しに劣りたり、今一度茲を遊ばし候へ、御矢一と箭

受納め、我が鎧の實をためし候はむと、走りを敵て控へたり、足助心に
 思ふやう、彼れ先ほどの矢をしりながら、茲を射よとたゞきしは、鎧の下
 に腹巻か、小がね鎖を二重三重、かさね着たるは、必定なり、いでや甲の眞
 向を、物の見事に射抜むと、金磁頭の矢を取り出し、さらば一と矢仕らむ、
 受て御覽候へと、云ひも果さず引絞り、矢聲するどく射放てば、思ふにた
 がはぬ彌五郎が、眉間深に射籠たり、要害の痛手に、彌五郎も、所をかへ
 すあへなくも、笠置の山の塊と、成り果たりし兄弟が、最後のさまこそ哀
 れなれ、

四 段 笠置の寄手敗北の事附東國勢發向の事

去程に、荒尾兄弟が、最後を軍の初めとし、追手搦手城の内、おめき叫てせ
 め戦ふ、矢叫の音、鯨波の聲、且しもやむ時あらざれば、大山もくだけて谷
 となり、坤軸も折て海底に、沈みやせむとおもひしに、はや黄昏ころにも

なりければ、寄手は彌が上にかさなりて、持楯を突立し、攻よせしに、南都の盤若寺の使ひ、本性房といふは、世にも稀なる大方の、律僧なりけるが、ころもの袖を結びあげ、やつと一と聲掛ながら、大磐石をかるしと、頭上に高く差揚て、いくたびと高く投出せば、數萬の寄手、楯もからだも粉な微塵、打ち碎かれて東西の、阪よりとつと人波を、うたせて深き谷々も、忽ち死人の山をなす、かゝる所に、河内の國より早馬を立、楠多門兵衛正成、手勢五百餘騎を従へて、赤阪山にぞ楯籠る、追討延引せば、由々敷大事に及むと、告るを聞て、寄手ども、色を失ふ其處に、又備後の國より、櫻山四郎入道旗を揚げ、其勢都合七百餘騎、勢ひ破竹の如く、其名國中にとゞろきて、人皆恐てありければ、油斷ならじと告にけり、前には笠置の城堅固にて、諸國の大勢、晝夜を分たす、攻たつれど、寄手はあだ死するばかり、後ろには楠櫻山の忠臣、大義を唱へ、名聞を正し、死を以て國に報ひむと

す、六波羅方是を聞て、狼狽し、東國へ加勢を乞事、楯の齒を引が如く、北條相摸入道大に驚き、我が一門を呼び集め、軍評定とりとなりしが、先つ大將軍には、大佛陸奥守貞直、足利治部大輔高氏、其外都合十二人と定め、侍大將には、長崎四郎左衛門尉を頭にて、名ある侍三十八人、入江蒲原の一族、横山猪俣の兩黨、此外武藏相摸伊豆駿河、上野五ヶ國の軍勢、都合二十萬騎を相すぐり、同月二十日に、鎌倉をぞ出さしむ、嘶く駒の足並も、みだれぬ跡にもなふて、静々すゝむ兵もの、輕げに着なす黒革の鎧の袖の、鏽々と摺合ふ音は、風ならで、身にしみ渡る心地せり、隊伍の旗さし物、思ひしにおし立て、先手の勢は追々に、美濃尾張にぞ着にける、

五 段 陶山小見山夜笠置の難所を越ゆる事

去程に、備中の國の住人、陶山藤三義高、小見山次郎某は、笠置の寄手にありけるが、東國の大勢、近江に着たりと聞、一族若黨共にさどすやう、是ま

で數度の戦ひに、石にうたれ、遠矢にかゝり、打死する者、幾萬騎、去り、とて何の功もなく、只死たるばかりあり、されば屍未だ冷ざるに、名まつ消ゆといへる、古人の言葉にも恥かしく、兎にも角にも死ぬる命ならば、人目にかゝる働きをなし、武勇の程を後までも、残し置むと思ふなり、情思ひめぐらせば、平家の亂より以來、大剛の者と名をよばれ、愛はやさるゝ輩も、左程の高名とは思はれず、先づ熊谷平山が、一の谷の先陣は、後陣の大勢をたのみ、梶原平三が二度の駈は、源太を助けむが爲、佐々木三郎が、藤戸を渡りしは、案内者の業、同く四郎高綱が、宇治川の先陣は、生月の爲なるべし、是をさへ、今の世までも口々に語り傳へて、屍は朽ても、其名は残りけり、今や諸國の大軍が、夜るひるとなくせむれども、落し得られぬ此城を、われらが手にて、落しなば、名は古今にならひなく、功は萬人の上に立ぬべし、幸ひ今宵の雨風に、一と夜討試みて、天下の人を驚かさむと、一

族五十餘人、覺悟を極め、死出の門出に、曼陀羅を、各肌着に書付て、熊手を結ふたるさし、細を、二た筋ばかり用意なし、鳥も通はぬ城壁の、北の方より二町ほど、艱難辛苦、積み重ね、登りて見れば、其上に、一段高き要所あり、岩石たゞみ、かさなりて、古松枝を垂れ、苔苔露滑かにして、老杉天を突、五十餘人の一族ども、進退、茲に谷りて、途方に暮て居たりしが、陶山藤三氣を勵まして、此絶壁をもものともせず、藤にすがり、岨をよぢ、頬にしたゞる玉の汗、拭ひもあへず、這ひ上り、携へもてる差繩を、松の梢に打懸て、岩の上よりかけはしや、命をからむ、驚かづら、草の古根に取すがる、患もなく、一族は、やすし難所を越にけり、

六 段 陶山小見山笠置の城を焚事

附錦織判官代父子討死の事
去程に、漸く屏を上り越ぬ、城の摸様を見廻すに、北の口一方は、山の嶮き

をたのみとし、警固の兵ものひとりもなし、只いひがひなき下郎擊、二十有餘人、櫓の下に薦を張り、箒を幽かに焚き棄て、前後もしらす眠りたり、陶山小見山諸共に、一時安堵の思ひをなし、皇居はいづくならむと、規ひつゝ、本堂の方へ行程に、ある役所の者共が、此足音を聞付て、何國の誰ぞと答ひれば、陶山吉次どりありあへず、怪敷ものに候はず、是は大和勢にて候が、餘りに風雨はげしくて、物騒がしき宵なれば、不意の出來事氣遣ふて、夜回り仕つり候と、誠しやかに答へければ、重ねて問ふ者なかりけり、是よりすゝみて、城中を、誰れ憚らす見廻りて、陣所へに打向ひ、御用心候らへと呼はつて、皇居間近くすゝみ行、内裏の様子をうかがへば、蠟燭數多燈されて、振鈴の音もかすかなり、大膽不敵の藤三が、今はかうよと思ひつゝ、後ろの峰へ走せ上り、人なき坊に火を掛けて、同音に鯨波を揚ければ、四方の寄手是を聞ずは、や城中に、及び忠の者ころあれ、いざ聲を合せ

よと、追手搦手七萬餘騎、一度に合す鯨波の聲、轟雷世耳を劈くばかりにて、須彌の大山も、今や崩れむとぞ覺ゆる、陶山一族、此機をばつさず、この役所に火を掛けては、かしこに鯨波をぞつと揚、彼しこに鯨波を作りては、この櫓に火を放ち、四方八方に走せ回り、大勢のやうに見せければ、一騎當千の官軍も、風雨はげしき真夜中に、不意をうたれしことなれば、東西度を失ひて、一と支も支得ず、弓矢かなぐり物の具を、すて、嶮しき崖堀も、所さらはず、我先に、落て行ころ口惜しけれ、錦織判官代是を見て、賊き人々の振舞かな、萬乗の君を守護し奉り、天下の大勢を引受て、雄を争ふ者共が、戦はずしてにぐる法やある、いつまで惜む命ぞと、大音聲に呼はりて、我手の兵に下知をなし、向ふ敵と渡り合ひ、切りつ切られつ、追つ追はれつ、左を射ては右を突き、右を射ては左を倒し、鬼神夜叉も及ばしと、おもふ働きなしけるが、矢種も射盡し、太刀も折れ、力もつきて

詮方なく、親子二人郎等十三人、敗れし笠置の雨風に、かばねをさらし無
き人の數に入て哀れなれ、正成茲に籠りなば、山のけはしきを頼とせ
す、守りの兵を置べきに、嗚呼口惜しや、謀茲に出ずして、思はぬ敗北をな
したるは、昔孔明死して後蜀の後主劉禪が、摩天嶺の守を怠りて、魏の大
將鄧芥に、其嶮を越られ、遂に都を落されしに、露もたがはぬありさまと、
思へば胸も腸も裂けむばかりに覺ゆけり、

七

段

後醍醐帝笠置の城御遁口の事

去程に、猛火風を颯て四方に起り、餘煙皇居に懸りて八方をふさぐ、警固
の武士ども爲むすべなく、其上軍兵は、皆ちりしに落行て、所詮籠城難
ければ、主上を初め奉り、御側にさむらふ公達も、跳のまゝに落給ひ、一二
町が程は、前後左右に供奉せしが、風雨烈しくて道暗く、鯨波の聲はとゞ
ろきて、谷より谷に山彦のこゑすこければ、思はずも、別れしになりは

て、後には萬里の小路中納言、藤房卿と、舍弟宰相季房卿と、兄弟ふたり
の其外は、恐れ多くも大君の御手を引人更よなし、いかにもして夜のう
ちに、正成がこもりたる、赤阪城へと御心を千々に碎かせ給へども、草葉
に置ける露程も、習はせ給はぬ御歩行なれば、夢路をたどる御心地、一と
足目には息を續ぎ、二た足目にはやすらひ給ひ、兎角に道のはかどらず、
晝は木陰に玉體を隠させ給ひて、あやしげの草を齒と遊ばして、大御心
を惱まされ、夜は道なき淺茅生の野原の露をわけさせ給ひ、みけしの御
袖はしあへず、たどらせ給ふ事三日三夜、漸く山城多賀の郡なる有王山
のふもとまで、たどりしで落させ給ふ、素より野道の事なれば、供御の
備へも無きまゝに、藤房卿兄弟は、餉參らすすべもなく、心を碎き氣を
もみて、手足もたゆみ身も疲れ、爲むかた涙にくれけるが、玉體も、次第々
々に弱らせ給ひ、いと物すごき谷おひの岩を枕にかしこくも、暫し夢をそ

結ばせ給ふ、梢を拂ふ松風を、雨の音かと驚きて、立せ給へば、生ひ茂る松の下露はら〜と、御袖の上にかゝれるを、疾く見そなはし遊ばして、さして行、笠置の山を出しより、おめが下には、かくれがもなし、と遊ばし給へば、藤房卿、大御心を察し、参らせて、暫し涙にむせかへり、いかにせむ、たのみ陰とて、立寄ば、おは袖ぬらす、松のしたつゆ、と力もなげに口すさむ、聲もにぶりて伏し去はれ、しばしは顔ももたげ得ず、此形容を四の緒にしらべ合すも、一としほに、哀れ昔のしのばれて、身にしみ渡る秋かぜの、さるふ草葉に、鳴虫の、聲もかなしく聞えけり、

八 段 後醍醐帝六波羅へ行幸の事

去程に、山城の國の住人、深須入道、松井藏人の兩人は、漸く御坐所を捜しあて、雀躍こさどりなして近よれば、主上逆鱗さかざねまし〜て、はたと睨にらませ給ふ御威光に、深須入道、足すくみ、心變りて、忽ちに、助け奉らむと思へども、跡につ

ゝける藏人が、心の底を計りかね、ためらふうちに、藏人は、是非をも云はず、怪しげの、張り輿こしに乗せ奉り、先づ南都の内山へ、そ入れまつる、嗚呼、是昔般の湯王が、夏臺に囚とらはれ、越王勾踐が、會稽に苦しみし形勢かたちも、よもや是れには及ぶまじ、扱十月二日になりつれば、六波羅の大將、常盤駿河守範貞が、三千餘騎にて、警固し、参らせ、宇治の平等院びやうどういんへ成し奉る、其日、關東の兩大將、都へ入らずして、直ちに、宇治へ参内し、先づ三種の神器をば、持明院新帝へ参らせむと奏すれば、藤房卿を以て、三種の神器は古より、繼體の君位を、天に受させ給ふ時、自からは、授け給ふの寶器なり、逆臣共が威を振ひ、天下の權を握にぎるとも、また三種の寶器をば、自みづからもひまゝにして、新帝に、渡し奉るのためしなし、いかに乞ふとも許さじと、いと儼げんに仰せ出されければ、關東の兩大將も、常盤範貞も、言葉なくして、まかり出づ、夫より三日を過ぎ、風箏にめし替られ、六波羅さして、そならせらる、日

來の御幸と事かはり、鳳輦は、數萬の武士が取り圍み、七條を東へ急がせ給ふ、かなしひかなきのふまでは、紫宸北極の高にましまして、司々の儀式を受させ給ふは、あへなく軍卒の、密しき守護に畏しこくも、大御心をなやませられ、時移り物變り、樂しみ盡て悲しみきたる、榮枯盛衰は世の習ひ、唯一場の夢のまど、見る人涙を流し、聞人心を傷ましむ、抜日を経るに従ひて、程遠からむ九重の雲井の上の御住居、おぼし出して御袖をしぼらせ給ふ折こそ、おれ、雨の音の聞えければ、

住なれぬ、板屋の軒の村しぐれ、おとを聞にも、袖はぬれけり、と遊ばされたる御心を、くみ奉るだに、つれなきを、中宮の御方より、御琵琶を贈らせ給ふとて、御文の奥に、

思ひやれ、ちりのみつもる、四の緒に、拂もあへず、かゝる涙を、とありければ、引かへし、

涙ゆるなればは月の曇るども、どもに見し夜の影は忘れし、とかへりごと遊ばして、かなたの空を見るなはし、御言葉さへもなかりしは、哀といふもおろかなり、

九 段 赤阪城寄手敗北の事

去程に、東國勢未だ近江へ入らざるに、早くも笠置の落しと聞、無念やるかたなく、一騎もみやこへいらすして、伊賀や伊勢路の山を越、或は宇治醍醐の道を横切て、正成が籠りたる、赤阪城へ打向ひ、其ありさまを見渡せば、方三四町ばかりにて、俄かに築き立たりと見え、はかど敷堀をもほらず、一と重の屏を塗りたて、櫓二三十掻ならべいとあはれなる城なれば、寄手指さしあざ笑ひ、かばかりの城はわれ、が片手に載せて投げつべく、正成にいかなる秘術あればとて、片時もこらへ得へけむやと、罵り合てやまざりき、正成は素より策を帷幕のうちにくらして、勝

事を千里の外に、決せむ程の名將なれば、究竟の射手を二百餘人、城中に伏せおきて、舍弟の七郎と、和田五郎正遠に、三百餘騎を差副て、かたへの山に忍ばせたり、寄手は是を露しらず、只一戦に落さむと、三十萬騎、得物（つと）を振かざし、甘きに蟻のつく如く、四方の切岸まで、我劣らじと、寄掛たり、正成は、思ふがまゝに、敵を引寄、指つめ引つめ射させけるに、瞬（まばた）くひまに千餘人、射倒しければ、東國勢、初めの廣言に似もやらず、攻口遠く引退き、鞍を卸し、鎧を脱ぎ、各陣所に休みけり、楠七郎、和田五郎、遙の山より見卸して、三百餘騎を二九手に分け、名も芳（かた）しき、菊水の旗を嵐になびかせて、雲霞の如に群がりし、三十萬騎が中へ割て入り、息をもつかず切り回る、寄手の大勢、右往左往に狼狽し、さけぶ處を城中より、三の木戸を押し排（お）き、二百餘の精兵が、さつさき雙（た）べて打て出づ、射手をも回してさむさむに、射立ければ、目に餘る、大軍なれども、支得ず、繼（つ）げる馬に飛乗て、鞭を

おつれど馬すゝまず、或は弛（ゆる）せる弓に矢をつがひ、射らむとすれども、矢は飛（と）ず、物の具一領に二三人、取付く引合ひて、争ふうらに、主は討れ、親は失せ、嵐に堪へぬ木の葉武者、蜘蛛の子ちらすが如くに、そ、皆ちかくに落のびて、石河々原へ逃て行、指もの東國勢、思ひの外に爲損じて、正成の武略、悔（あや）どりがたしと思ひけむ、吐田（は）檜原のはどりに、たむろして、畿内の案内者を先きにたて、人家を燒山を荷（か）り、後攻のなきやうなし置て、心おさなく正成を、落さむとぞ、謀りける、

十 段 其二附釣屏の事

去程に、本間澁谷の者共が、此軍議を聞、我等々なかには、親うたれ、子死する者數しれず、今をめぐりと世の中に、生きあがらへて、何かせむ、我等ばかりも、馳向ひ、討死せむといひ捨て、駒に鞭おてすゝみければ、諸軍も、これに勵（た）まされ、我後れじと、駈出す、彼の赤阪の城といふは、東一方ころ、

山田の畔高くして、少しく難所のやうにもあれ、三方は皆平地にて、堀一と重に屏一と重たて、回したる小城なれば、如何なる鬼神がこもりたり共、何程の事かあるべきぞと、又逆茂木を引のけて打て入らむとなしけるに、城中は静まりかへりて音もせず、是は又きのふの如く、思はぬ所に奇兵を出し、我等をなやまさむ謀ど、皆一同に思案なし、十萬餘騎を相すぐり、むかひの山にさしのぼせ、残る二十萬騎は、稻麻竹葦の如く、八重九重に城を取りまきて、鯨波を作りて攻けれど、城中よりは、矢の一と筋も射出さず、更に人ありとも見えざりければ、寄手もいよ／＼機に乗て、四方の屏に手を掛て、同時にのぼりこえむとす、正成は素より屏を二九重にこしらへて、待ちに待たる事なれば、時分はよしと、八方の釣屏一度に切て落す、屏に取付たる千餘人、壓におされて動き得ぬ、ひまを見掛て、大木や、大石などをなげかくれば、又七百餘人、同じ枕に斃れけり、東國勢兩

日の戦に、士卒を數多失ひて、今は此城を攻めむと云ふ者ひとりもなし、只其はとりに陣を取り、遠攻にぞ攻たりける、

十一段 其三附熱湯を濺ぎ掛る事

去程に、四五日が間、城を圍みてありけるが、四町に足らぬ平城に、四五百騎ばかり籠りしを、東八か國の大勢が、攻兼たりといはれては、後世まで、の物笑ひ、是迄は皆早まりて、楯をも衝ず、攻具をも用意をなさず、攻しゆゑ、多くの人は損せしが、此たびは術をかへたやすく打れぬやうに氣を配り、今一度、攻掛らむと云ひ合せ、ため皮をあてたる持楯を、かつさつれてぞ攻たりける、高からぬ切り岸に、深からぬ堀の事なれば、走り懸て昇らむ事、いと心安く覺ゆれども、是もまた、釣屏にてやあらむかと、心ひろかに危おみて、左右なく屏には、寄つかず、皆堀の中におり立て、熊手を掛て、塗り屏を、引落さむとなしければ、城兵は、時ころよけれど、とり／＼

に長柄の柄杓に熱湯の、にえかへりたるを白雨の、ふるよりしげく八方に、うゝぎ掛れば寄手ども五鉢ひとしく焼たゝれ、猶も熊手も打すて、一時にさつと引にけり、寄手の大將途方にくれ、攻るてだても盡はて、頼を集め眉をひそめ、軍評定とり、に、其日、を送りし、いかに評定なせばとて、勝算茲に出ざれば、兵糧攻めにすべしとて、陣所、に櫓をかき、逆茂木引てぞ守りける、是より暫しの休戦に、城兵勇氣いやまして、げふか、と開戦の、あらむ其日を數へつ、一日千秋の思ひをなせり、抑正成か此城を築きなせしは、門出の軍に敵を兩三度、挫きておのが兵略の、妙味をかれに示さむと思ひしまでのことなれば、素よりながく、猶籠る、用意も更にせざりけり、

十一一段

正成の奇計赤阪城を焼寄手を欺く事

去程に、正成諸將にいひけるは、三十萬騎の大軍が、よせくるたびに挫か

れて、戦ふ勇氣も、今は早、盡果たるか、遠卷に、城を圍みて、近寄らず、夫れ天下の人に先きだちて、創業の功を立むとせば、節に當り義に臨み、命を棄て、大君のためには身をも碎くべし、左はいふもの、事に臨て恐れ、謀を好むてなすは、又勇士のなす所、されば兼て思ひし如く、此赤阪城を焼落し、我れ自害したるさまになしおかば、東國勢まこと、思ひ、勇み進て下向せむ、此時た、ちに打て出、又攻上らば引籠り、四五度かれらを惱まさは、なぞか退屈せざらむや、是れ身を全ふして、敵を亡すの計略なり、早用意あるべしとて、二丈ばかりなる穴をはり、敵の死體を其中に、いくつともなく積重ね、たぎを以て之を掩ひ、風雨ある夜を待にけり、嗚呼天何ぞ忠臣をむなしく、茲にすつべきや、飄風俄かに吹起り、強雨しきりにふりいで、咫尺の間も見えわかず、寄手の陣所は、これが爲幕を垂れ、斥候の兵もたさざれば、正成打見て今宵ころ、是屈竟の時なれど、物にさがし

き兵ものゝ、一人跡に残したき、我等四五町落延びし程を量りて城中の、
 櫓々に火をかけよと云ひつゝ、鎧を脱ぎ棄て、或は三四人或は五六人、別
 れゝに落て行、正成長崎が厩うまやの前を通る時、敵兵早くも是を見付、何者
 ならば、眞夜中に案内もせず通るぞと、言葉するぞと、咎とがひれば、正成聞も
 おへず、我は大將の使にて、軍用の爲に出けるが、黒白もわかぬ此やみに、
 思ひ掛なく行道を踏たがへたりと云ひすて、足疾く過る折しもあれ、
 馬盗人うまびとと呼はりて、弓矢つがひて正成の眞直中まんなかをぞ射たりける、其矢正
 成の臂うでのあたりをしたゝかに、貫きたりとおもひしが、身には少しも立
 ずして、咎とがをかへして二三間、後ろにはたと落にけり、誠忠誠義に心をた
 め、鎌かまひ上たる鐵身に、不正不法の輩が射たる鎗やり矢やのいかにして、立べき
 すきのあるべきぞ、咎とがをかへすも理ことわりりなり、かくて正成は、二十町餘り落
 のびて、しりへに見やる赤阪の空は、猛火に焦されて、火花は雨に打まじ

り、敵の營所に降かゝる、寄手の勢は此不意に驚きさわぐ水鳥の、飛立如
 く悦ひて、鯨波を作りて攻のぼり、やうすいかにど見渡せば、堀たる庭の
 大穴に、枕をならべ、焼たゞれ、うせたる人は、誰れかれと、わから兼たる形かたち
 勢いきほに、多門兵衛正成も、死たる事と寄手らが、思ひつめしは、なかくゝに、筆
 に寫もおろかなり、嗚呼、正成が菊水の旗を再びなびかせて、笠置の山の
 御夢に、こたへまつらむ、其時は、敵のたまじひ此城の、燈の如くに消えう
 せむ、燈の如くに消えうせむ、

薩摩 藪鶯二篇 終

明治廿七年五月十三日印刷
明治廿七年五月十九日發行



編輯者

四 竈 小 辰

發行者

西 村 寅 次 郎

印刷者

潮 來 彦 右 衛 門

印刷所

博 聞 社

發行所

東 雲 堂

同

東 雲 堂
大阪府本町四丁目

東京市日本橋區通リ四丁目七番地

東京市京橋區銀座四丁目一番地

東京市芝區田村町八番地

東京市日本橋區通リ四丁目七番地

東京市芝區田村町八番地

東京市日本橋區通リ四丁目七番地

東京市京橋區銀座四丁目一番地

東京市芝區田村町八番地

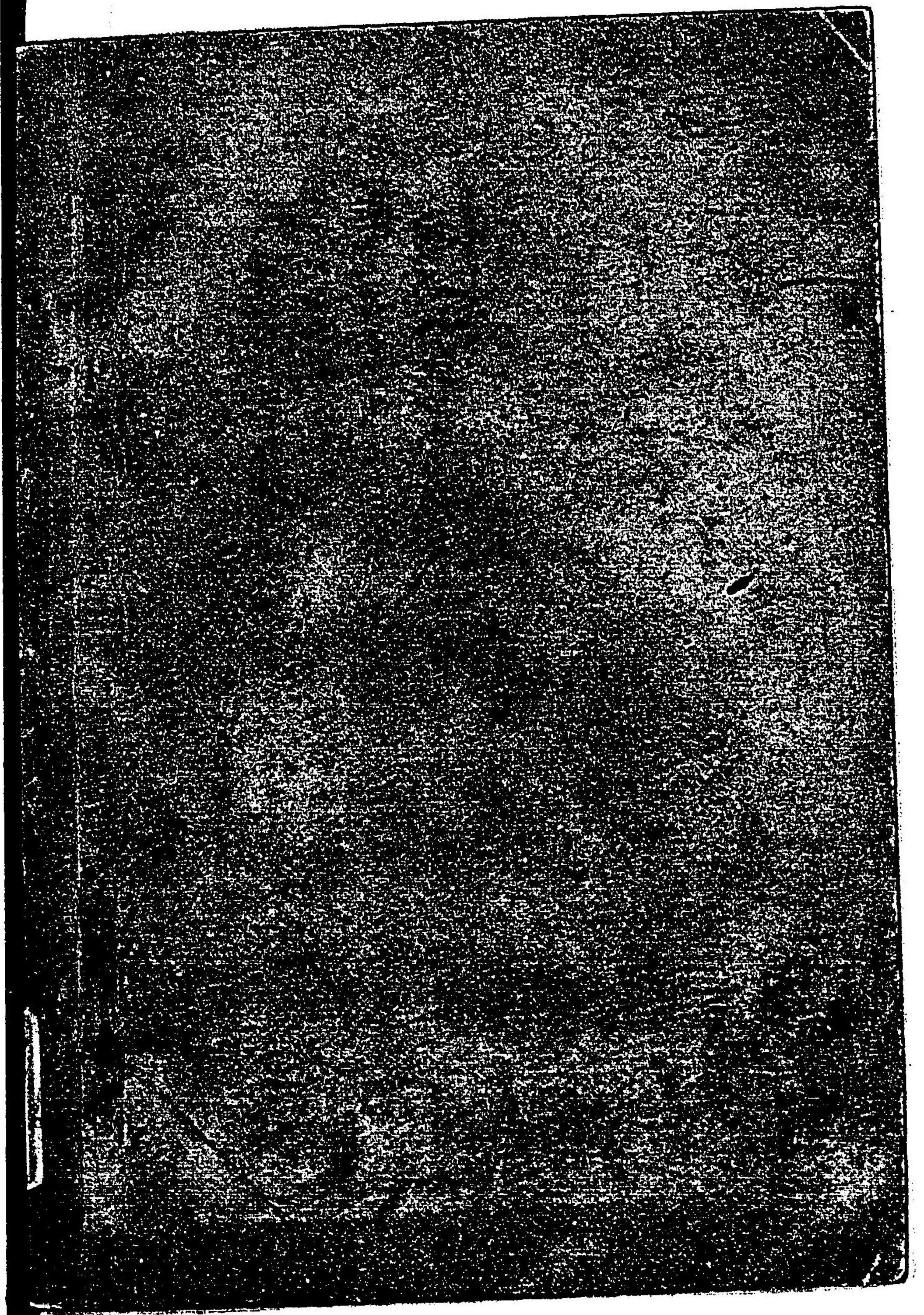
東京市日本橋區通リ四丁目七番地

東京市京橋區銀座四丁目一番地

東京市芝區田村町八番地

東雲堂音樂書籍發刊目錄

○曲尺八早指南	樂水山霞月翁序 川瀬後童翁編	特別正價 郵送稅價	金十六 錢四
○尺八獨稽古	川瀬復童翁合著	全全	金二十 錢
○尺八獨案内	花月園六花翁著	全全	金九 錢
○篠笛獨案内	前木玉兎先生合著	全全	金十五 錢
○明笛獨稽古	玉筒道人著	全全	金十五 錢
○明笛獨案内	町田櫻園先生著	全全	金十五 錢
○月琴獨稽古	島田梅玉先生合著	全全	金十二 錢
○月琴清樂の乘	國本半溪先生編	全全	金十三錢、 四錢
○和樂器獨案内	町田櫻園先生著	全全	金十五 錢
○音樂軍歌	町田久先生著	全全	金三 錢
○唐清曲集	島田梅玉先生編	全全	金十五 錢



164
1117

吉永經和先生作詠
四竈小辰先生編輯

薩摩琵琶歌藪
鶯

東京書肆
東雲堂發行

074641-000-0

特22-166

薩摩琵琶歌藪鶯

吉水 經和/作

M27

CEJ-0149

